

あおい通信 第115号

日本の世界遺産めぐり

その十 日光の社寺（文化遺産）②

*日光東照宮

表門を入ると右から鈎の手（かぎのて）に三棟が並び、右から下神庫（しもじんこ）・中神庫・上神庫。奈良の正倉院に代表される校倉（あせくら）造りを模した建物で、春秋の渡御祭（ときよさい）「百物揃千人行列」の千二百人分の装束や流鏑馬（やぶさめ）の道具などが収蔵されている。春秋の祭りの一週間ほど前から準備のため扉を開けるので内部をのぞける。上神庫の妻（側面）に二頭の大きな象の彫刻があるが、耳の付き方や尻尾の形が実際とは異なる。東照宮建立時の

いわばアート・ディレクターのチーフだった狩野探幽（かのうたんゆう）が実物を知らずに想像で彫刻の下絵を描いたことから「想像の象」とよばれている。

東照宮を訪ねると様々な建物に多様な動物を見ることが出来る。これらの動物のほとんどは平和を象徴するものとして描かれている。

奥社入口を護る左甚五郎の彫刻作品といわれている「眠り猫」は、前足をしっかりと踏ん張っている事から、実は、徳川家康を護るために寝ていると見せかけ、いつでも

世評・時評

「十二月の懺悔」
 この願いを叶えていただけたらお金も名誉も要りません：天に祈ることが年に何度かある。

健康診断で引つかかった項目の再検査に無事パスしますように。風邪の発熱が翌朝までに退きますように。多くはその程度の願い事である。祈願と成就を繰り返して、とうの昔に欲望と無縁の聖人君子になっていて良いはずだが、凡俗の悲しさでそうはいかない。（生きてゆくために大事な私利私欲、長持ちさせてここまで来つ）

確かに欲望がなくなっても困るのだが、なんだか神仏を毎度だましているようで心苦しい。世間には似たような罪の意識を感じている方もおられるだろう。お誓いしたとおり、富貴とは縁を切っており、ちゃんとハズレております。その証拠に、大晦日が抽選日の年末ジャンボ宝くじ購入を毎年、罪滅ぼしに使っている。今年十二月のクジも買う。きつとまたハズレるだろう。それでいい。ハズレてこそ買った意味があるのだ。とはいえず、人生一寸先は闇、もしくはバラ色である。



想像の象



眠り猫



三猿

飛びかかれる姿勢をしているともいわれているが、もう一つの教えとして【裏で雀が舞っていても、猫も寝る程の平和】を表している。

昔、左甚五郎が旅先で、夜道に迷ってしまったという。心寂しい山奥で人家は見受けられないが、歩いているうちに、薄明かりのついた一軒の家を

見つけた。「なんとかお願いして軒先でも一夜、お借りしよう」とその家を訪ねると、家の中にはおばあさんがいて「いいですよ、お入りなさい」と家の中に入れてくれた。なんだか陰気なおばあさんだが、甚五郎は喜んでその日は泊まらせてもらうことにした。道に迷った疲れからか、ぐっすり

と寝込んでいたが、深夜、物音に目を覚ました。すると、ぼんやりとした薄暗いなかで、何か大きな物体がいた。その眠っている猫を彫刻した。これが左甚五郎の眠り猫なのだといわれている。

神厩は寛永十二年（1635）に建てられたもので、桁行三間、梁間五間切妻、銅瓦葺き、妻入りの建物です。東照宮境内の中で唯一の白木造りで、当初は初代將軍徳川家康が関が原の合戦の折り、乗馬していた馬が神馬とされていたらしい。長押しには猿が馬の守り神であるという信仰から猿の彫刻が八面彫り込まれて、子育てから恋愛、結婚、妊娠と人間の一生が風刺されている。「見ざる・言わざる・聞かざる」を模った三猿があり、子供の教育とは、悪い事を見たり・言ったり・聞いたりしないように育てなさい。という教育を論じているものとも、東照宮の根本理念を現わしているとも云われる。

雑記帳 《無題》 額賀美保



ヨツチャン

「いよいよ十二月ですね」と挨拶を交わす月がやって来てしまった。泣いても笑っても、今年ももう終りだと思つと、何となく焦りや後悔など交々の

「尊い生命を授かったその上に数億円まで頂戴しては…」等と建前と本音の狭間で混迷する十二月である。

念のために、お礼の口上を考えて練習はしております。ヨツチャン

「十二月の懺悔」
 思いが、じわじわと襲ってくる気もしている。

十二月は又、「師走」とも言うが、師走は僧（師）がこの月になると、彼方此方と忙しく走り回る処からこの語が出来たとも言われているし、為果つ月（しはつつき）一年の終りの月が転じたとも言われている。

十二月末日の大晦日は「つごもり」とも言う。「つごもり」は「月隠（つきごもり）」の略。大晦日の夜更けに年越し蕎麦を食べる習わしがある。一年の締め括りの十二月は兎に角忙しい。それは多分昔も今も変わりが無い。

しかし、老人の私達には

はさしてやる事が無いというか、はや出来ぬと言ふべきか、どちらにしても役に立たぬ存在となりつつある。頑張つて年賀状など書く他になし。そして何よりも、寒さに負けず風邪ひかず、此年の終りを恙なく元気に越えたいもの。

そして最後は「除夜の鐘」。大晦日の十二時から各寺院で百八つの鐘を撞き始める。余韻の静まるのを待つて撞く為、約一時間係る。百人の煩惱を消滅する為と言われ、除夜の鐘の音に、行く年来る年の思いを深くする信者で無い人達の間に和を祈って、新しい年へ

葵友の会 広報コーナー

11月度行事の結果

麻雀大会

19日（水）ベイブ。今回は3卓12名で、優勝は初参加の久下さんでした。



カラオケ会

21日（金）バンバン。10名の参加。

12月度行事の予定

グルメの会

18日（木）長次郎。台湾旅行が中止となりましたので、グルメの会として「回転寿司に行ってみよう！」を実施します。

（事務局長）

◆編集委員会より

「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。係員・飯島までお願いいたします。

では来る年の世界の平和を祈って、新しい年へ

利用者さんの紹介コーナー

春日井 澄子(金)

小さい頃母が、字が上手と褒めてくれ、それがとても嬉しかったのを覚えていますが。書道、ペン習字と習いました。マラソンが早く、女子高のとき、常に三番以内に入っていました。編み物もずっとやっています。



石井 節子(土)

縫い物が得意で子供の服は縫っていました。十年、スポーツクラブに通いました。ヨガ、プールをやった後に仲間とお昼を食べに行くのが楽しみでした。



赤須 律子(土)

ずっと日本舞踊を習っていました。そこから小鼓に興味を持ち、池袋のコミュニティーカレッジでチャレンジをしました。



東本 鞠子(木)

八月からお仲間に入れていただきました。私が想定した「女の人生フルコース」は、可愛い奥さん、やさしい母親、しっかり女房、そしてやっぱ最後は可愛いおばあちゃん、今なら笑っちゃいます、七八才。



私の想定外

東本 鞠子

利用者さん紹介コーナーの続き「女の人生フルコース」

コース半ばの頃にはすでに脱線、それでも、子供孫、曾孫に恵まれば残りは余りの人生で「マツ、い

『落語の中の蕎麦』③

絹田 治夫

『蕎麦の流行』 続き...

最初は京都にも大阪にもあったが、幕末ではすっかり江戸の食べ物になっている。

幕末に発行された江戸時代の風俗詩『定貞漫稿』(もりさだまんこう)によると大阪ではうどん屋が4、5町(1町は約1ヘクタール)に1軒あり、江戸では蕎麦屋が1町に1軒あったという。

万延元年(1860)江戸府内の蕎麦屋の数は

いか!」のはずが、元旦には脳梗塞のお年玉。幸いに後遺症はなく、ほっとした気のゆるみ、シャワー中の尻もちで今度は腰の圧迫骨折。ベットに横になるのも、起きるも、笑うも、クシャミ、冗談じゃない最悪です。水泳、山、ゴルフ、旅行、趣味はすべて削除。机上の活字を追うだけの単調な明け暮れ、あゝこうして「ウツ」になっていくのかな」と、何故かポイントがつかなくてもないのに診察券だけは、各医療科揃い踏み私のサイフの中に鎮座しています。

オホホではなく、アハハと笑えれば又楽しい。それらの人生の歴史を重ねた方達に接すること、そして老いも障害も関係なく、一生懸命、身近かなことに挑戦する姿勢に刺激をうけました。そして、気がつきました。私にはかなりの我がままで、頑固だわと、反省しきりです。嫌なことはチチンブイブイです。

精神的な心と健康は身近にあることを自覚できた様な気がします。娘の様な、孫の様な介護士さんの「手伝おうか?」この一言が嬉しいよね!

脳しげき

加藤 勇

リハビリは

あきずあせらず

アラセブン

年をとるほど

アラエイト

私が強く

アラナイン

平均値

脳トレは

デカ字が味方

漢クロも



欧米のマナーが広まっただけで、粋に蕎麦を食べる人が少なくなりました。蕎麦を食べるときには音をさせるのがマナーです。大いに音を立てて食べましょう。

蕎麦といえは、「藪」(砂場)「更科」といった老舗暖簾会(しにせのれんんかい)が今も有名である。また、そば打ち名人などが一代で店を起こした手打ち系も注目されており、古くは「一茶庵」の創始者片倉康雄名人、現代では「達磨(翁)」の高橋邦広名人などがその代表格だ。一代名人が弟子を広げ、代々継代していけば老舗暖簾会系となる。

あおい俳壇・歌壇

みちのくの 紫菀の 香りかな
鳴く鳥の 枝見上げれば 秋の空
相田 美代子

何がしか 病を抱えし 人集う
朝の陽が 私を包む 輝きて
今日も生きよと 躡きついに
河西 千恵子

山肌の 窪める所 蔦からみ
黄葉し秋の 陽にかがやけり
麻生 伊登子

帆船だ よこはま港の 和船見て
おもてなし おくゆかしさと 和の心
連綿として われらが誇り
鈴樹 清明

題詠「和」で2首

生きる貴さを知る。人生は長くて短い。せめて生きている間に何かをしたい。そう思いながら、夢をかけた様な夜が明ける。

大風が吹く、四方へと荒れてゆく、行き過ぎてゆく日々、何をしたらいいのか。何かを生きている間に残したい。そう思っている間に夜が明ける。人は権力を握ると常識では考えられないことを平気でやる。最近の政局を見ればよく解る。

山川の広がり雲海が流れる。長い様な人生は、実は短いものだ。生きていく間に思い出になることをしたいと思っている。

蕎麦の前につまみと日本酒を嗜む、といった流麗な時間が流れている店も多いようです。今回の話はこれで、終わり

ふわふわ亭わび助



僕の人まについて

山寄利重

春はもうすぐ 何処にある 想い出ばかり浮かぶ夜は 心からさむしい。雨の背にしみこみ瞬間